

第5号

2022.9

奈良県

世界遺産をもっと知るための

世界遺産ジャーナル



目次

《巻頭特集》「古都奈良の文化財」

1. 「古都奈良の文化財」の世界遺産としての価値とは
2. 「古都奈良の文化財」の構成資産

- もっと知りたい世界遺産 第5回
- 「飛鳥・藤原」を世界遺産に! 第5回

奈良県

「古都奈良の文化財」

Historic Monuments of Ancient NARA

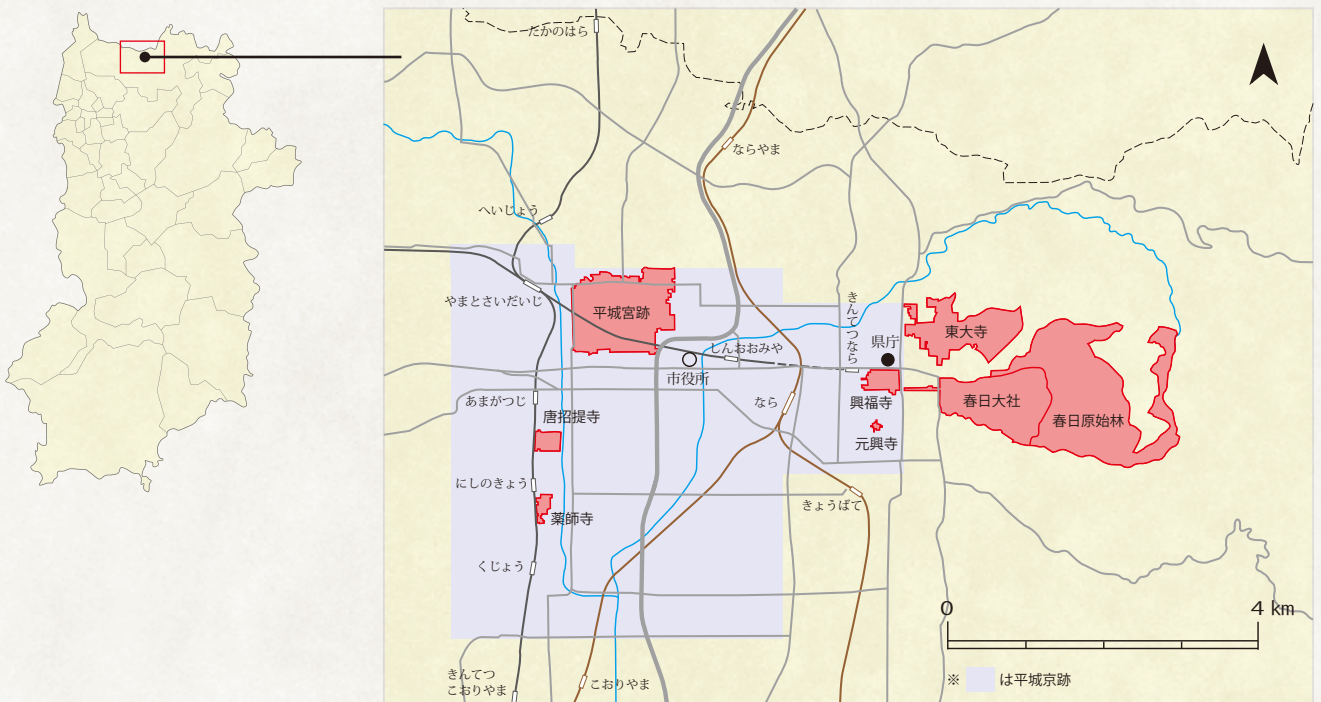
01 「古都奈良の文化財」の世界遺産としての価値とは

「古都奈良の文化財」は、1998年に京都で開催された第22回世界遺産委員会で審議され、世界遺産一覧表に記載されました。

「古都奈良の文化財」は、奈良に日本の首都が置かれた710年から784年の間が、日本の文化的な発展と政治的な発展をもたらした非常に重要な時代であったことを証明していると位置付けられています。

その顕著な普遍的価値（OUV）を証明する構成資産は、地図に示したように8件あります。その内容は、5つの仏教寺院、1つの神社、1つの文化的景観、1つの考古学的遺跡と、実に多様なものです。

今回は、このように多様な構成資産からなる、世界遺産「古都奈良の文化財」について特集します。



「古都奈良の文化財」では、以下の4項目の評価基準が適用されました。

評価基準 ii

古都奈良の歴史的な記念工作物は、中国や朝鮮半島との文化的交流の結果としてもたらされた日本の建築及び芸術の進化を示す希少な物証であり、その後の（当該分野における）発展にも大きな影響を与えた。

評価基準 iii

古都奈良の文化遺産群のうち、独特の建築遺産は、奈良に都が置かれていた期間における日本文化の栄華を示している。

評価基準 iv

平城宮の地割・建物配置及び奈良に遺存する記念工作物群の意匠は、アジア古代の宮都における建築及び計画性の顕著な事例である。

評価基準 vi

奈良に所在する仏教寺院及び神社は、仏教や神道といった信仰が、今なお独特の精神的な力及び影響を持ち続けていることを示している。

「古都奈良の文化財」の特徴

それでは、世界遺産一覧表に記載された「古都奈良の文化財」の特徴とは、どのようなものなのでしょうか？
以下に簡単にまとめてみたいと思います。

- 天皇の住まいであるだけでなく、儀礼や政治、行政の中心であった平城宮、碁盤の目に整然と区画された平城京内に建立された多くの仏教寺院は、日本の首都において緻密な都市計画が実施されていたことを表す。
- 神域として守り伝えられた原始林という自然が、神社そのものへの信仰と一体となって、文化的景観を形成。
- 8世紀という世界でも有数の古さである木造建造物が、伝統手法により守り伝えられ、現在も数多く残る。
- 唐や新羅・渤海などの東アジアとの交流によって発展した、宮殿や仏教寺院だけでなく、日本古来の宗教施設である神社も構成資産となり、信仰の多様性を示す。
- 世界遺産の絶対条件である不動産としての構成資産の価値だけでなく、現在も信仰と宗教行事が継承されているという無形の要素が資産の価値として高く評価。

このように「古都奈良の文化財」には、仏教寺院、神社、文化的景観、考古学的遺跡という様々な種類の構成資産があるだけでなく、言明された価値の内容も非常に多岐にわたるのです。

つまり、「古都奈良の文化財」は、「奈良ドキュメント」※という文化遺産に関する国際宣言によって、広く認知されるようになった遺産・価値の多様性を、まさに具現した象徴的な存在と評価することができるのではないのでしょうか。

※「奈良ドキュメント」とは？

「奈良ドキュメント」とは、「古都奈良の文化財」が世界遺産になる4年前の、1994年に奈良市で開催された世界遺産の真正性に関する国際会議で採択された宣言です。

文化遺産の「物質的側面」だけでなく、動産・無形の要素も含めた「意味」も重視するようになり、多様な遺産、多様な価値の存在を認める意識が世界中で広がりました。

この宣言によって、文化遺産の概念が拡大したと、高く評価されており、今もなお世界中に影響を与えています。



奈良文化財研究所提供

考古学的遺跡である平城宮跡では、現在も毎年、発掘調査が実施されています。調査が終了した後は、埋め戻されますが、一部は写真の奥に見えるように、調査と研究の成果を踏まえて、植栽や基壇復原、建物復原等、さまざまな手法で整備し、公開活用が図られています。



春日山原始林は、近代までは天皇の命令によって神域として保護されてきました。1924年に天然記念物、1955年に特別天然記念物に指定されてからは、行政によって、その自然の保全が図られていますが、その活動は多くの市民団体によって支えられています。

とうだいじ
東大寺

Today-ji Temple



東大寺提供

仏教によって国家を鎮護することを目的として聖武天皇が742年に「大仏建立の詔」を出されたことを契機とし、747年に大仏の鑄造が開始され、752年に

大仏の開眼供養会が行われました。

平城京の東側に造営された広大な旧境内に所在する国宝・重要文化財に指定された24件26棟の建物（正倉院、手向山神社含む）が世界遺産リストに記載されていますが、このうちの7棟が奈良時代から現存するものです。

二月堂等で、752年から一度も途切れることなく続けられている修二会は、鎮護国家や五穀豊穰等、人々の幸福を願う伝統行事です。

こうふくじ
興福寺

Kohfuku-ji Temple

藤原氏の氏寺であった興福寺は、710年の平城遷都に伴い、平城京の東端の地に建立されました。度重なる火災により、奈良時代の建物は残っていませんが、その伽藍は、創建当初の配置をほぼ忠実に踏襲しています。さらに、現在残る五重塔や東金堂等の中世の建造物にも古式の建築様式が採用されたことが判明しています。

国宝4棟を含む6棟の建造物が世界遺産リストに記載されています。



興福寺・一般財団法人奈良県ビジターズビューロー提供

かすがたいしゃ
春日大社

Kasuga-Taisha Shrine



春日大社提供

768年の創建と伝わる春日大社では「式年造替」の制度が今も続いています。本殿は1863年までは20年ごとに建て替えられていましたが、明治以降は国宝に指定さ

れたため、現在は屋根の葺き替えや彩色等の修理が行われています。

社殿の構成や配置は、創建当初からほぼ変わっていないと推定され、現在も14世紀末～15世紀初頭や17世紀初頭の建造物が数多く残されています。その数は、4棟からなる国宝本殿を含め、28件31棟にのぼります。

1136年に始まった「春日若宮おん祭」では、御旅所祭をはじめとする様々な神事を行い、国民の安寧などが祈願されます。

かすがやまげん しりん
春日山原始林

Kasugayama Primeval Forest

春日大社の背後にそびえる独立峰である御蓋山^{みかさやま}。さらにその背後に屏風のように連なるのが春日山などの山々です。春日大社創建以前より神聖な山として崇拜されていたこの山々は、841年に伐採と狩猟の禁止令が出され、神山として守り伝えてこられました。近代以降、「春日山原始林」として特別天然記念物に指定され、原生の状態を維持した照葉樹林として保護が図られています。

自然林としてだけでなく、日本人独特の古来の信仰との結びつきにより太古の姿を残している文化的景観として不可欠な存在であると評価されました。



春日大社提供（写真：矢野建彦）

がんごうじ
元興寺
Gango-ji Temple



元興寺提供

平城遷都に伴い、718年に飛鳥寺から移転されました。当初は中心伽藍だけでも平城京の8町を占めたとされる大規模な寺院でしたが、中世以降に中心伽藍が失われて、規模が縮小し、現在は創建当初の僧房を前身とする本堂・禅室などを残すのみとなりました。鎌倉時代に僧房を改築した本堂と禅室の屋根に飛鳥時代の瓦が現在も使用されているだけでなく、建築部材にも奈良時代のものが多く使用されていることが判明する等、今も創建当初の息吹を感じることができます。

やくしじ
薬師寺
Yakushi-ji Temple



薬師寺・一般財団法人奈良県ビクターズビューロー提供

680年に藤原京の地で創建されましたが、平城遷都に伴い、718年に改めて現在の場所で建立されました。東西に三重塔が並びつつ双塔伽藍の典型例です。東塔をはじめ、5件7棟の国宝・重要文化財建造物が、世界遺産リストに記載されました。創建当初から唯一残る東塔は、一段階古い7世紀末の建築様式を踏襲したと推定されており、各重に裳階が付く独特の姿をした建築です。3月から4月にかけておこなわれる花会式(修二会)は1107年に始まった行事で、紙で作った10種の造花が薬師如来に供えられます。

とうしょうだいじ
唐招提寺
Toshodai-ji Temple



唐招提寺提供

759年に中国・唐から来日した鑑真により創建されました。中心伽藍の金堂と講堂、そして宝蔵と経蔵の2棟の校倉が創建当初から現存しています。特に講堂は、平城宮の建物を760年頃に移築改造したもので、現存する唯一の古代の宮殿建築です。780年以降の建立と推定される金堂も、奈良時代(8世紀)の金堂建築として現存唯一の事例です。

「うちわまき」は5月におこなわれる行事で、鼓楼から団扇が撒かれる様子は季節の風物詩として、よく知られています。

へいじょうきゅうせき
平城宮跡
Nara Palace Site

708年2月に遷都の詔が出され、同年12月に地鎮祭を行い、710年3月に元明天皇が藤原京から遷居しました。

他の構成資産である寺社は、平城京の内部や近隣に計画的に造営されました。平城宮は、天皇の居所としての王宮であるだけでなく、政治や儀礼の場、行政機関の集合体であり、当時の首都・平城京の要というべき存在であったと評価されます。

これまでの発掘調査により、大きく2時期に区分される大極殿跡をはじめ、数多くの建物跡や区画施設、井戸や庭園等が確認され、宮殿構造が判明しつつあります。また、現在は国営歴史公園として整備が進められ、調査研究成果に基づいた往時の建物等の復元も行われています。



「評価基準」とは何か？ 〈後編〉

第4号でも紹介しましたが、世界遺産の作業指針「世界遺産条約履行のための作業指針」には、資産が10項目のうちの基準の1つ以上を満たすとき、その資産に顕著な普遍的価値（OUV）があると認められる、と規定されています。

今回は、文化遺産に適用される評価基準6項目のうち、後半3項目の内容と事例について解説します。

評価基準 iv

歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観(の類型・典型)を代表する顕著な見本である。

ひと言で表すなら、「建築様式や科学技術の世界史的な見本・代表例」と言えるでしょうか。

本文の冒頭に掲げられているとおり、「歴史上の段階」ということが重要で、「ローマ帝国の国境線」（イギリス・ドイツ、1987年登録、2005年・2008年拡張）や水道橋「セゴビア旧市街とローマ水道橋」（スペイン、1985年登録）をはじめとする、ヨーロッパに点在する古代ローマ帝国の遺跡や、スペインの建築家「アントニ・ガウディの作品群」（1984年登録、2005年拡張）等の著名な建築家の作品群を代表例として挙げることができます。また、18世紀以降の産業遺産にも多く適用されており、産業革命に

関わる鉱山等の他、「インドの山岳鉄道群」（1999年登録、2005年・2008年拡張）等の鉄道施設や、運河などの水利施設といった事例があります。

日本の世界遺産では、「古都京都の文化財」（1994年登録）の庭園をはじめ、「いつくしま 厳島神社」の神社建築群、日本における近代製糸業の開始を示す「とみおかせいしじょう 富岡製糸場」等の価値付けに適用されました。



評価基準 v

あるひとつの文化(または複数の文化)を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本、又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である。(特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの)

評価基準vの価値は、「環境に順応した伝統的な住居や景観の世界的な見本」とまとめることができます。世界各地の独特な住居の様式や、その集合体である集落の形態や土地利用の特性を評価する項目といえます。

事例で真っ先に思い浮かぶものとして日本の「しらかわごう 白川郷・ご か やま 五箇山の合掌造り集落」（1995年登録）を挙げることができます。海外でも、尖った石積み屋根で知られる「ア

ルベロベッコのトゥルッリ」（イタリア、1996年登録）、キノコのような形の土壁と草葺きの家が特徴的な「コンソの文化的景観」（エチオピア、2011年登録）等の伝統的な集落への適用例がよく知られています。

さらに集落だけでなく、「ぶどう コルディリエーラの棚田群」（フィリピン、1995年登録）や、「ブルゴーニュの葡萄畑のクリマ」（フランス、2015年登録）等の農耕地としての土地利用や、その文化的景観も世界遺産に登録されています。



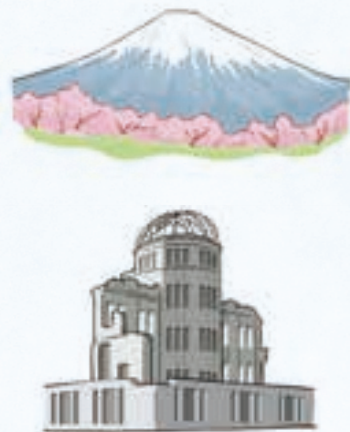
評価基準 vi

顕著な普遍的意義を有する出来事(行事)、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある(この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい)

「人類史上、重要な歴史的出来事や伝統・宗教・芸術との結びつき」を不動産である世界遺産の価値に位置付けるのがこの基準です。

この評価基準は、「原爆ドーム」(1996年登録)や、「アウシュヴィッツ・ビルケナウ ナチスドイツの強制絶滅収容所(1940-1945)」(ポーランド共和国、1979年登録)といった、いわゆる「負の遺産」が代表例として紹介されることが多いのですが、事例はそれだけではなく、今に受け継がれる信仰の場や、宗教や国家の出発点となった場所にも多く適用されました。

日本の世界遺産でも多くの資産に適用されていますが、主な事例としては、「富士山－信仰と芸術の源泉－」(2013年登録)が挙げることができます。この登録に際しては、近代ヨーロッパでの「ジャポニズム」の発端の要因のひとつである葛飾北斎の浮世絵等が高く評価されました。



※本コーナーのイラストはいずれもスタディスタイル提供

第5回 飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群

「飛鳥・藤原」を世界遺産に!



「飛鳥・藤原」の構成資産候補の紹介③ 飛鳥・藤原の墳墓(前編)

前方後円墳の終焉と墳形の変化

「古墳」といえば、奈良県内にも数多くあり、2019年に世界遺産に登録された「百舌鳥・古市古墳群」に代表される前方後円墳のことを、多くの人は思い浮かべるでしょう。3世紀から7世紀にかけての古墳時代、バリエーションのある墳墓の形のなかで、その頂点にあったのは、ずっと前方後円墳でした。

「飛鳥・藤原」の地域にも奈良県最大、国内第6位の318mの全長を誇る五^ご条野丸山古墳^{のまるやま}があります。しかし飛鳥時代になると、中国の影響によって墳墓を簡素にする考えが導入され、前方後円墳は築造されなくなりました。その後100年あまりの間に日本の墳墓は、さらに独自の発展を遂げていきます。

いしぶたいこふん 石舞台古墳

Ishibutai Tomb

飛鳥盆地の南東に築かれた墳丘一辺約51mという日本屈指の規模を誇る方墳です。中央にある横穴式石室の天井石が露出した姿は、飛鳥を代表する風景として、あまりにも有名です。横穴式石室の全長は約19mもあり、全国最大級の規模を誇ります。

古墳の西側でおこなわれた発掘調査で、いくつかの小規模な古墳を埋め立てて造成したところに築かれたことが明らかとなりました。この墳墓に葬られた人物の権力の大きさを物語っています。飛鳥時代前半の最有力豪族で、626年に亡くなった蘇我馬子^{そがのうまこ}の墓とする説が最も有力とされています。

前方後円墳終焉後の有力者の墳墓の形態の変化の初期の段階を示す貴重な事例です。



世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会提供

しょうぶいけこふん 菖蒲池古墳

Shobuike Tomb

飛鳥の中核と外の地域をへだてる甘檜丘^{あまかしのおか}の丘陵の南端に築かれた一辺約30mの方墳です。発掘調査で、墳丘の裾に石が巡らされていることが確認されました。横穴式石室の内部には、他に例のない特殊な形をした石棺が2つ並んで設置されています。

この古墳は、築造からわずか半世紀で古墳自体が意図的に埋められてしまったことが、発掘調査で明らかになりました。

横穴式石室という古墳時代の埋葬施設を踏襲しつつ、有力者の墳墓が方墳に変化し、規模も大きく縮小したことを示しています。



橿原市提供

けんごしづかこふん 牽牛子塚古墳

Kengoshizuka Tomb

前方後円墳の築造が終焉した日本で、墳墓の頂点として日本独自に創出されたのが、八角墳です。

墳丘は、八角形の対辺長が約22mあります。発掘調査で、墳丘に石を貼り、周囲に石敷きを施した構造であったことが明らかになりました。墳丘の中央に設けられた石槨は、巨大な石に埋葬する部屋を2室彫り込んだもので、その内部からは、漆塗りの棺の破片や七宝の棺飾り等が出土しました。その構造や立地から、牽牛子塚古墳は、661年に亡くなった齊明天皇^{さいめい}の御陵とする説も有力視されています。

令和4年3月に史跡整備が完了し、公開が開始され、その築造当初の石張りの墳丘を目の当たりにすることができるようになり、明日香村西半部の広い範囲から、高台にそびえるその姿を望めるようになりました。



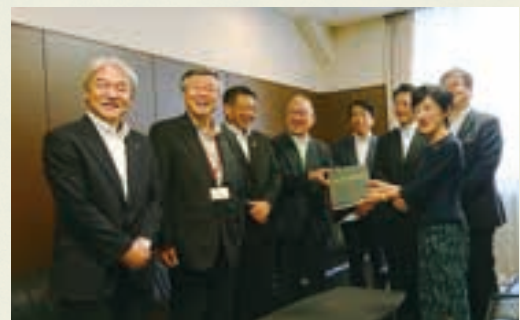
世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会提供

～「飛鳥・藤原」の世界遺産登録に向けて～

世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会は、奈良県・橿原市・桜井市・明日香村で組織し、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世界遺産登録に向けた諸事業を展開しています。

令和4年6月29日には、荒井正吾知事、亀田忠彦橿原市長、松井正剛桜井市長、森川裕一明日香村長が文化庁を訪問し、推薦書の素案を提出しました。

今後も、推薦内容の充実や、構成資産の公開活用の促進を図るなど早期の世界遺産登録に向け、事業を進めてまいります。



世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会のホームページでは、世界文化遺産としての提案のコンセプトをはじめ、構成資産候補の紹介、協議会主催イベントの案内などをおこなっています。

<http://www.asuka-fujiwara.jp>

